

末黒野

すくろの

9月号 (通巻865号)



黒揚羽

八橋へ風ほしいまま菖蒲園
菖蒲田や花の高さを風渡り
溺れけりあぢさゐ寺の紫陽花に
手をついて蟾もの申す岩の上
岩穴出でまた岩穴へ青蜥蜴
本棚の本横積みに梅雨明けぬ
涼しさや雲の切れ間を月走り
湖へ出て華やぎ飛べり黒揚羽

松本三千夫

(名譽主宰)

青葉木菟

黒滝志麻子

湧き水の一縷の音や夏つばめ
夕焼やいつまで沖の一つの帆
雨恋うて蟾にもあるや甘え声
睡蓮や鯉ゆつたりと水を練る
螢火の思ひの丈を引きにけり
さよならをくり返す子等夕焼けて
画廊より蚊の飛び出せる銀座かな
まな板にかつて足あり鱒たたく
滴りや千余の階の奥の院
海紅豆海の際まで町のびて
闇どこも青き香立てり青葉木菟
炎天の砂利の置かるる捨田かな

大鯉

森清堯

谷戸の風留め泰山木の花
高空へくさび打つかに橡の花
風集め風放ちたる新樹かな
鄙の家の屋根をしのぎて桐の花
麦秋や丘の畑に農ひとり
橡の花牛見当たらぬ山の牧
碧潭へ渦のわき立ち谷空木
大鯉の半身覗かせ未草
はつらつと天を引き寄せ今年竹
日の名残り樹冠に仄と合歡の花
日の高き峠の木椅子独活の花
柴山や麦稈帽の見え隠れ

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

麦の秋

石黒興平

十葉やもう秘すること無き齡
若きらの寄りて祭の稽古笛
折り畳み自転車を組む薫風裡
麦の穂の波立つ風を聴きにけり
利根川の分かつ沃野や麦の秋
豪農の名残の門や麦の秋
服薬の一種増えたり梅雨の入り
俳諧に余生を預け明易し
夜濯や果たせぬ夢を流せずに
早苗はや瑞穂の国に適ひたる

夏つばめ

岡野里子

桐の花けぶらふ雨の平泉
日輪の暈の二色夏つばめ
忍冬泥田の畦へ香りけり
黄菖蒲の占むる小流れ稚魚の影
ケーナの音睡りを覚ます未草
藻の花や湧水ひかり躍らせて
涼風や孔雀広ぐる羽の見得
花合歓や二時を動かぬ花時計
ひらりひらり漏れ日を捉へ竹落葉
日盛りの鉄鎖の錆や日本丸



緑
蔭

田中臥石

干鰯場の簀の子返しや蜥蜴出づ
つばくらの低く飛ぶ街雨意兆す
あえかなる植田の夕日風渡る
筍を恙の夫婦掘りみたり
日雇の足を洗へり立葵
緑蔭に開く岩波文庫本
緑蔭や志麻子姉似の人に逢ふ
ペダル踏む海へ真つ直ぐ青田道
萬緑や老いて捨て身に末黒野誌
神頼みして検診の日の入梅

麦の秋

森清信子

アイロンの走るシャツの上夏来る
牧師館の出窓開けられ垣の薔薇
湧水に触るる小笹やほととぎす
万緑の底の湖黙深き
山よりの風の重たし朴の花
夕映えの抱く一村麦の秋
溪流の岩場を渡り青葉冷
夕照を返す川面や朴散華
落暉追ふ鴉声の嘎れぬ柝の花
夕薄暑生姜をきかす煮豚の香

若葉風

安齋久英

黒南風や軒をかすめて明け鴉
紅白の帽子の揺るる若葉風
高階の半ばはつしと夏燕
指先に風の湿りや戻り梅雨
夕虹や番鴉の袈裟掛けに
物憂きは心の奥に梅雨の月
大蜘蛛を仕留し後やなまぐさき
路地抜けて薄暑の街へ救急車
紫陽花や鉄幹晶子比翼塚
マンションの天辺に鳶若葉風



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



早苗田 岡田史女

禅寺にヨガの一行緑さす
蓮浮葉唐門前の大鉢に
薫風や叩き干さるる柔道着
食卓は時に文机薄暑光
辻に立つ青面金剛ねむの花
味爽の山駝け抜けて時鳥
早苗田の水深々と濁りけり

更衣 及川照子

交叉点 小田嶋野箭

ふるさとへ鈍行列車麦の秋
更衣マヌカンの腕外されて
菩提樹の花の静けき古刹かな
風そよぐ植田に滲む夕日かな
翡翠の青き一閃日は西に
岩つばめ垂水の飛沫きらめきて
身に余る獲物に挑む蟻の列

形見着て賢母に遠し更衣
八重なれば蕨菜も活け玉勝間
元町へ渡る運河や夏めきて
街薄暑ひと一斉に交叉点
万緑に同じ色無し谷の風
溪流は此処より北へ河鹿笛
湯上りのビール飲み干し死すとも可

青炎集

黒滝志麻子選

相模原 内田 梢

万緑や鳥語賑はふカフエテラス
谷風に身を委ねをり夏の蝶
理不尽なるニユース数多や半夏雨
名書家の妙なる文字の団扇かな
雨兆す相模の果てや山法師
同郷と知りて杯上ぐ冷し酒

横浜 戸田 澄子

聞き上手の頷き上手新茶汲む
夏めくやおフィス街行くクールビズ
菖蒲園続く木の橋土の橋
脱ぎきれぬ皮の三枚今年竹
麻服の皺や無言のダンディズム
蕾まで棘の鋭し夏薊

横浜 谷島 弘康

軽暖のジャズの谷間の紅茶かな
梔子や花の香に触れ風に触れ
梅雨寒の暇もてあまし古書肆へと
夏めきて装ひ軽く足軽し
梔子や花は錆ぶるも香を残す
梅雨寒のガラス戸曇る花屋かな

雨あがり枯山水の石涼し
句を詠みて余生静かに梅雨ごもり
ざあざあと耳鳴る日なり梅雨深し
里は梅雨ロシアで熱き≪杯
知足てふ色紙飾りて夏座敷
醜草に生くる力や梅雨の庭

横浜 北郷 和顔

フラダンスの子の眼指やみな跣足
夕蛩の恋のやりとり谷戸の闇
ほうたるの甘き瀬音の闇夜かな
戸隠の宿坊偲ぶ濃紫陽花
妙義山の裏も表も青葉光
廃校の砂場に玩具柿若葉

横 浜 谷 貝 美 世

新緑のうねりて風の大樹かな

夏落葉暗渠の口を堆く

雑草の覆ふ祠や夏蛙

里山の水車の乾く五月かな

新茶汲むちやんで呼び合ふ友人

里山や風の気ままに忍冬

横 浜 大 霜 朔 朗

夏めくや日差しを避くる始発バス

夏みかん空家の庭を独り占め

苗束を代田に配る下手投げ

五月闇せめて掛軸美人画に

熟るとも雀の寄らず麦の秋

蓮池の衆目集む三分咲

横 浜 本 間 せ つ 子

軽鳧の子の畦に残るや草の闇

少年の素手で捕へぬ夏の蝶

一日を遊び尽して日焼の子

若竹の風を集むるそよぎかな

明け渡る空に光るや蜘蛛の糸

美しき獲物宙つり蜘蛛の糸

川 崎 滋 野 暁

茅葺に踊る幟や風立ちて

忘れ物茅花流しを引き返し

卯月曇鳥声突と突き抜けて

哲学の道の瀬音や虎耳草

倒木の流れを塞ぐ青葉山

踏石の並びの雅夏の露地

横 浜 有 賀 鈴 乃

散松葉波頭崩るる朝の浜

塩田の積まるる薪や夏日影

露天湯へ遠き潮騒星涼し

遠山の雪溪連ね夕映ゆる

プランター狭しと雨後の花菖蒲

ゆれ止まぬ蛸袋や夕明り

横 浜 片 岡 さ か 江

花菖蒲名は万葉の雅から

朝戸繰る日毎濃くなる四葩かな

ほうたる来いふと口ずさむ蛸狩

水音の闇より蛸ここかしこ

うす闇を描くほたるの恋模様

遠来の客に香焚く梅雨さなか

耕 土 集

森清 堯選



内濠の鯉のぬたうつ薄暑かな
梅雨空や一人大工の槌の音
大手門樹齡を競ふ夏木立一
竹林の十葉百の花あかり
花菖蒲皇居の風に解れけり

横浜 市川 夏子

夏菜莢のいと艶やかや洩潜め
競ひける方の彩り花菖蒲
ふと触るる手の温もりや虫狩
闊歩する夏制服の膝眩し
夫と居て所在なき日や梅雨に入る

横浜 松橋 輝子

さざなみの植田となりぬ遠筑波
降り立てば里の訛や青田風
故里や遙かに続く青田道
羅や畳紙にうすき妣の文字
淋しさは見せず一人の夏座敷

横浜 吉原ひろ子

卯の花や垣にしじまの窓明り
鍬振るふ男の背中麦の秋
川とんぼ風に行方の定まらず
鎌倉の鐘の音しつむ梅雨入かな
少年の机より出つ子かまきり

横浜 六崎 正善

言ひさして夫を憎まず新茶注ぐ
眼裏に宿る螢火持ち帰る
黒揚羽生れて雌伏の風待てり
岩を囓む走り根蟻の長き列
イントロの長き恋唄夕焼ける

横浜 岩崎 藍

江戸地図を広ぐる夫婦夏帽子
郭公やしぼし息継ぐ道標
富士見えぬ富士見公園町薄暑
あくまでも男友達心太
いつしかにくぐる山門山開き

横浜 高橋 泰子

朝焼雲

小川玉泉

(名誉顧問)

咲き初めぬ夾竹桃の紅と白
南天の花白じろと背丈超ゆ
二筋の朝焼雲や烏過ぐ
根より伐る百代の桜実をこぼす
箱詰めを解かれ寒河江のさくらんぼ
深谷の日射し受け止め山帽子

雑記帳 14

またまた大地震が関西地方を襲った。災害に見舞われた方々の心労を思うと、天災への備えの重要さを反省させられた。「備えあれば憂いなし」の大切さを再認識させられた。